

読売俳壇

矢島 渚男 選

暑すぎて白熊氷にも寄りず

窪塚市 広田 祝世

【評】猛暑続きで動物園も大変。白熊の池には氷塊を入れたが白熊、すでに熱中症気味で寄り付く元気がない。猛暑の耐えがたさを北極の白熊によつて表現し、極めて巧み。緑陰を飛び出せぬほど老いにけり

霧島市 久野 茂樹

【評】老人には瞬発力が無い。何か緊急のことがあつても、涼しい木陰を動けない。淋しい。

飯田市 井原 修

【評】ガルシア・ロルカはスペインの詩人、劇作家でスペイン内戦の時代にファシストによつて銃殺された。その墓へ、オリブの花から蝶がやつて来ては休んでいた。蛇つかむ鳥に頭上をかすめらる

和歌山県 助野貴美子

炎屋や白く見ゆるは人か木か

船橋市 中島かず代

心荒む日やひたす草むしり

東京都 山田真理子

東京が燃えるのを見た疎開先

東京都 鈴木千枝子

トマト挽き輪切りに塩や屋の畑

神戸市 高橋 和郎

食べ頃とやら何へり夜のメロン

横浜市 中川 浩子

不器用で賞罰あらず心天

東大阪市 梶田 高清

宇多喜代子 選

浴衣着て妹らしく姉らしく

深谷市 酒井 清次

【評】浴衣を着た姉妹。同じように見えているのだが、ちょっとした仕種や表情にもお姉さんにはお姉さんらしさが窺える。姉妹のかわいらしさがよく出ている句。

菅の風色なき馳走や夏料理

白河市 円谷 淑子

【評】見た目にも涼しげな夏料理。居間の暑気の消えた菅。運ばれる皿の料理も夏らしく、食欲をそそめるのはかりである。

病院の窓に暮れ行く夏至の雲

東大和市 神山 文子

【評】作者は入院中であるのだから、窓から暮れゆく空を見ている。今日は夏至。日の入りまでの時間が長い。病室での一日が暮れてゆく。専業の何事もなく瓶の中

秋田市 小林しゅん

高き畝低き畝あり夏野菜

磐田市 佐次本 守

海開き沖に真白き雲湧いて

輪島市 大向 信子

鐘が鳴るゆふべ花火の在りし空

上尾市 中野 博夫

触れるものすべてよすがに凌霄花

長野県 村田 実

女性よの一筆つきの水羊羹

東京都 藤ヶ谷国柱

夏の天ウクライナへと続く空

東京都 石田 絹子

正木ゆう子 選

手を止めて見られてゐたる帰省かな

神戸市 藤生不二男

【評】想像するのは農村風景。作業の手を止めて「あれ？どこの子だろう」と遠くから見られている。大人びたか、垢抜けたか。変わつてゆく自分が照れ臭くもある帰省の子だ。遂に來し超熱帯夜日本語に

東京都 本多 明子

【評】最低気温が三十度以上の夜を日本気象協会では超熱帯夜というそうだ。因みに最高気温が四十度以上になると酷暑日。あと少しの辛抱か。「お前さん」とはじめてよばれ釣忍

東大和市 木田 博幸

【評】劇中だろうか。それとも本場にそう呼ばれるとしたら、どんな場面だろう。季語がびっぴりの、珍しい内容。涼しげな女性を思う。間引菜を積み置き次の畑仕事

神奈川県 石原美枝子

浜降や襖の波を胸に割る

茅ヶ崎市 原田 博之

太陽も雨も仲間江夏祭

逗子市 鈴木喜久代

熱風に塞がれ地下の出入口

神戸市 西 和代

けふ着せし巨船の点々ライラック

横浜市 矢沢 寿美

からわりや地鳴りめきゆく応援歌

市川市 佐藤 詩子

海開海に行けない暑さかな

佐野市 伊藤 菊治

小澤 實 選

ビールでも飲もう話はそれからだ

堺市 土居 健悟

【評】訪ねて来た相手は、かなり気が立っていたか。それを鎮めるようにビールを勧めて、二人で飲もうとしている。もはや夏の日も暮れようとする。物語が始まりそうだ。

カリモチヨ香る涼夜のダーツバー

横浜市 岡 一夏

【評】カリモチヨは赤ワインをコップで割ったカクテル。ダーツを投げながら飲むには、びっぴりと思つ。独特の香りもありそうだ。回し蹴りに吹っ飛ばさず夏の果

伊勢市 藤田ゆきま

【評】友人の帽子を回し蹴りで吹っ飛ばす、なかなか手荒れ歓迎ぶりであるが、ほんとうに親しい間柄ではありうる。爽快感もある。金髪にピアスにバイト夏休み

神戸市 遠藤 音々

青嶺よりハンクグライダーテイクオフ

東京都 東 賢三郎

兜虫次々飛ぶや森の朝

北名古屋市 月城 龍二

噴水や靴下まるめ靴の中

川口市 蓮田 陽子

盆の僧に児が先生と目を見張る

兵庫県 宗平 圭司

じじと鳴く蟬の鴉をふりきりぬ

小金井市 平田 雅一

七キロの西瓜隣家と半分

相模原市 福島 幹夫

俳句の力を実感

俳句あれこれ 堀田季何 (俳人・歌人)

最近、俳句の力を実感している。名句の力という意味ではなく、人々を慰め、人々が世界と向き合う助けとなり、人々の人生を豊かにし、時には人々を変え得る力のことである。

今年、結社や協会、小中高、カルチャーセンターといった「定番」に加え、不登校ないし発達障害の子供たち、鬱病で休職中の教員たち、がん患者やその家族たち、ホームに住む九十代半ばの高齢者たちといった方々にも俳句を教えたり、紹介したりすることができた。この場でも、俳句という短詩型がここまで威力を発揮することになった。巧拙でなく、俳句を書く、読むという行為そのものが尊いのだ。二十日まで行われた俳句甲子園の審査委員長を初めて務めた。俳句は、高校生の人生にどれだけ影響を与えているのか。どんな俳句を書いているのか。次回はその辺をお伝えしたい。初秋の俳都熱田津波瀆立つ



題字デザイン・イラスト

福田美蘭